

## 「2023年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学文学部4年 福山 一茂

地理学教室に身を置き、多くの地域研究者と接してきた。私の指導教員も地域研究者である。しかし、言葉が違い文化も違う地域で研究をするのはハードルが高く、現地の研究者に任せたいほうではないかとさえ思っていた。このような私の考えは今回の研修で覆された。全く違う環境で過ごすことで自国との違いを感じ、その国独自の考え方やありようが浮き彫りになる。その独自性を研究するのが地域研究なのではないかという私なりの答えに行き着いた。

日本とベトナムの違いは多岐にわたるが、中でも私が気になったのは「民族」についての考え方である。日本政府が公式見解として先住民族であるとしているのはアイヌ民族のみである。一方のベトナムは最大集団のキン族をはじめ54の民族からなる国家であるとしている。日本でアイヌ民族について展示する施設はウポポイ（民族共生象徴空間）など北海道に所在するものがほとんどである。ベトナムでは全国各地に多くの民族が散らばることを背景として首都ハノイでも民族について知ることができる施設が2箇所あり、双方を訪れることができた。ハノイ中心部にあるベトナム民族学博物館では各民族で用いられる生活道具などが展示され、万博公園の国立民族学博物館を思わせる造りであった。もう一つの施設は郊外にあるベトナム民族文化観光村である。ここでは民族の寺院や家が移築されていて、その家には交代で各民族の人たちが実際に生活しているのだという。家では民族の伝統音楽が披露されたり、踊りや遊びを体験したり、伝統食を食べたりと民族について肌で知ることができる。しかし、この施設の目的はただ民族を紹介するというわけではなさそうである。円形の広場には赤地に黄色い文字で「団結、団結、大団結 成功、成功、大成功」というスローガンが掲げられていた。さまざまな民族の違いはありながらもベトナム社会主義共和国としての団結と発展を目指していくことを暗示するためのある種の権力装置として機能しているのではないかと感じた。そもそも民族とは何なのか、国家によって認定されたり、されなかったりするものなのだろうか。私のルーツが奄美という薩摩と琉球の間でエスニシティが揺動してきた場所であることも含め、今後考えていきたい。

最後になってしまったが、今回の研修において USSH ならびに ULIS の学生の皆さんには学校での授業、とくにベトナム語の発音については粘り強く教えていただいたのみならず日常生活でも多くのサポートをしていただき、また仲を深めることができた。ネイルをしたり、髪を切ったり、フットサルをしたりハノイの日常を垣間みるのは皆さんとの交流なしにはできなかった。私は卒業研究で日本に暮らすベトナム人の実態を調査し、修士課程でも引き続きベトナム人についての研究を行う予定である。日本で暮らすベトナム人を理解するには彼ら彼女らのベトナムでの暮らしを知ることなしには分からない。まだまだ知らないことだらけではあるが、少しでもその理解の糸口を得たように思う。貴重な機会を提供していただいた USSH、ULIS、京都大学の教職員の皆さまとさまざまな経験を共にしたメンバー、快く送り出してくださった指導教員である杉江あい先生、そして家族に心から感謝申し上げます。